

地域ブランド 戦略 34

地方PR機構 代表理事
殿村 美樹

暗い過去にも光を当てる

2022年が始まった。コロナ禍の不安は続きそうだが、社会経済は待たなしである。地域ブランドもコロナ後を踏まえた戦略を練らねばならない。

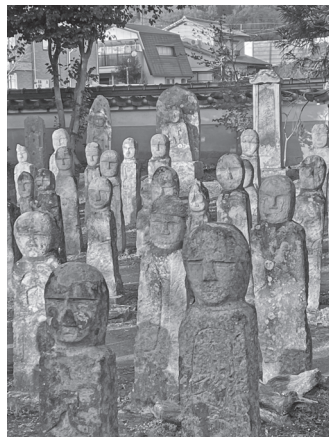
そんな中、これまで注目されなかった地域が新たな光を放ち始めている。兵庫県南部の加西市もそのひとつ。豊かな山間に広がる地域で以前はほとんど目立たなかったが、ここにきて新たな魅力に注目が集まっている。

ミステリアスな石仏群

たとえば外国人の顔と思しき五百羅漢。おそらく他に類を見ない石仏群といえるだろう。長い間土中に埋もれていたらしく、今は田園に囲まれた羅漢寺でミステリアスな魅力を放っている。なかには背中に十字が刻まれた石仏もある。五百羅漢は仏陀に付き添った500人の弟子とも、仏陀と同じ境地に達した者ともいわれる仏教由来の阿羅漢だ。この十字がキリスト教の十字架だとしたら、未曾有の歴史が埋もれている可能性がある。

そして隣接する姫路市はキリシタン大名・黒田官兵衛の故郷である。戦国時代に豊臣秀吉の軍師として活躍した生涯は14年、NHKの大河ドラマ「軍師官

兵衛」にも描かれた。当時多くのキリシタンが慕ったことは想像に難くない。そんな彼らが江戸時代の弾圧で隠れキリシタンとなり、この地に潜んでいたとしたら、この五百羅漢は未来に向けた彼らのメッセージかもしれない。想像は膨らむばかりだが、事実は歴史の闇に埋もれたままだ。



外国人を思わせる五百羅漢、背中に十字が刻まれた石仏もある

また、加西市は第二次大戦中「姫路海軍航空隊」が置かれた地で、今も若者たちが操縦士の訓練を受けた「鶉野飛行場跡」が残る。戦闘機が飛び立った滑走路や防空壕も当時のままで、若い命が次々と奪われた悲哀が漂っている。リアルに戦争を体感できる場として、全国でも貴重な存在といえるだろう。

その価値を発信しようと加西

市は19年、日本海軍最後の切り札といわれた戦闘機「紫電改」を復元し、飛行場跡の一角に展示した。今は多くの修学旅行生を受け入れて戦争の悲惨さを伝えている。さらに今春には特攻隊が乗り組んだ戦闘機「九七式艦上攻撃機」も復元展示される予定だ。

このプロジェクトには2000万円の復元費が必要とされたが、地元出身で阪神百貨店の社長を歴任した三枝輝行さんが、次世代へ戦争を伝えられればと全額を寄付した。紫電改の復元も歴史に詳しい市民がみずから資料を集めたことで実現したという。そんな市民の厚意を受けて、市は飛行場跡周辺の整備も進める意向だ。

このように、加西市で注目を集めているのは暗い過去の遺産といえるだろう。しかしこれが、コロナ後の新たな価値観である。以前は日本全体が観光立国を目指し、地域も明るい歴史ばかりに価値を見出していた。しかし今は、SDGsを背景に地域の暗い過去に向き合い、それを教訓に変えることが持続可能性を生むと考えられている。

日本は昨年末、真珠湾攻撃から80年の節目を迎えた。3年後には戦後80年となり、戦争体験者がほとんどいない時代に突入する。だからこそ地域ブランド戦略の方向性を見直し、暗い過去にも光を当てて、未来の武器に変えてはどうか。新しい年は始まったばかりだ。 **G**